

コロナ重症半数に後遺症

退院3カ月後も息苦しさ

高知大教授ら調査

新型コロナウイルス感染症の後遺症について、日本呼吸器学会と厚生労働省による国内調査の中間集計がこのほどまとまり、重症者の半数は退院から3カ月たっても息苦しさを感じている実態が明らかになった。同学会理事長で、高知大医学部の横山彰仁教授「呼吸器・アレルギー内科学Ⅱ」は「重症の人ほど肺などに後遺症が残りやすいことが分かってきた」と話す。

調査は、全国で昨年9月から今年5月に入院した中等症以上の患者（平均62歳）の自覚症状や肺機能などについてまとめた。高知大医学部付属病院に入院した約20人も調査に協力した。

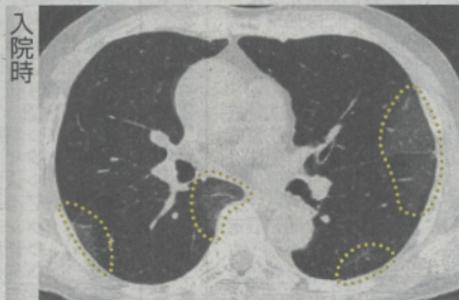
横山彰仁教授

中間集計によると、

重症者では、息苦しさが50%、筋力低下が77%、倦怠感が30%、2%の割合で続いている。酸素投与が必要だった中等症患者は、息苦しさが30%、筋力低下52%、倦怠感が24%だった。

横山教授によると、海外で報告されているデータ傾向と大きな違いはなかった。

入院時に肺炎があった353人のCT画像を調べた。



患者の肺のCT画像。入院時の炎症（白いもやのような部分＝黄色の点線内）が3カ月後もわずかに残っている。

べると、半数以上に当たる190人は退院後も肺炎の名残が見られた（図参照）。

また、肺活量や1秒間にどれだけ息を吐き出せるかを測る検査では、重症だった人ほど肺機能が回復していない傾向が確認された。

コロナ以外の細菌性肺炎では、これほど高い割合で長期間にわたって後遺症が残る例は少ないという。

後遺症の要因としては、ウイルスに反応して免疫が過剰に働く「サイトカインストーム」で血管が傷ついた可能性など、複合的な要因が絡み合っているとみられる。

横山教授は「肺機能の低下が息苦しさに影響していると考えられる」と指摘。その上で「中等症以上は後遺症が残ることが多い。感染しないように会話時はマスクを必ず着け、声を小さくしてほしい。感染して治った人も異変があればかかりつけ医に相談を」と呼び掛けている。

今後3カ月ごとに調査を続け、後遺症が長く期間や睡眠への影響などを明らかにする方針という。

（山本 仁）